

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770085

研究課題名(和文) 未活字化の日記資料群からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究

研究課題名(英文) The Self-formation of Educated Youth in Modern Japan: Based on the Findings from Raw Diaries

研究代表者

田中 祐介 (TANAKA, Yusuke)

明治学院大学・教養教育センター・助教

研究者番号：40723135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：「女性の日記から学ぶ会」(千葉県八千代市)の代表である島利栄子氏の許諾と協力を得て、同会収蔵の約3,000点に及び日記・家計簿・書簡類の目録化を実施し、資料全体の約7割の目録化を果たした。これにより、日記資料の「並べ読み」を実現するための基礎的な環境が整った。旧制第二高等学校のキリスト教主義学生寮である「忠愛寮」の寮日誌を調査・分析し、「多声響く内面の日記」の意味を考察した。

研究会「近代日本の日記文化と自己表象」を組織し、定期開催した。その成果を2日間のシンポジウムで公に発信した。これにより、今後の研究活動を深化するための学際的・国際的な研究体制の基礎が構築できた。

研究成果の概要(英文)：1) made a database of raw diaries that the Society for Learning from Women's Diaries (Josei no nikki kara manabu kai) had collected. 2) Researched and analyzed dormitory diaries titled "Chuai Ryo Nissi" that Christian students at the Second Higher School in Sendai city kept before and during WW2. 3) Organized the Research Project on Modern Japanese Diary Culture and Self-Representation in 2014 and thereafter held it periodically, which resulted the interdisciplinary symposium in 2016.

研究分野：近代日本の文学と思想

キーワード：日記 青年知識層 旧制高等学校 書記文化 読書文化 リテラシー 自己表象 アーカイヴズ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来も日記の歴史資料としての価値は認められてきたが、主要な研究対象は著名人が記した日記であった。近年では近代日本における庶民の日記資料への学術的関心が高まりつつあるものの、生活の記録としての日記刊行の数は限られていた。申請者は故・福田秀一氏(国文学研究資料館名誉教授、元国際基督教大学教授)が蒐集した約5,000点の日記関連資料のうち、明治から平成にわたる手製あるいは市販の計492冊の日記帳コレクションを目録化して公にした経験があった。目録化を通じて、近代日本を生きた無名の人々の生の営みと時代性を明らかにするために、日記資料の学術的価値を検証することが不可欠であると思に至った。

(2) 日記とは、現在の自己が過去の自己を未来の自己に読まれることを想定して書くという、重層的な自己表現の場である。上記のコレクションには学生を中心とする青年男女による「内面の日記」が多く含まれる。近年、文学研究では私小説を題材に近代日本における自己の表象と語りに関する考察が深められてきた。また、申請者も一貫した近代日本の教養主義への学術的関心から、第二高等学校の左傾学生の自己認識や、第一次世界大戦後の文学界における「自己の探求」の理想の変容を検証してきた。こうした経験を踏まえ、日常的な自己表現の現場である日記を分析することは、近代日本の知識青年層における自己形成の問題をより多角的に考察するために極めて有益であると確信した。

(3) 近代日本の日記資料の研究を本格化するためには、日記資料の保全と利用環境の整備が喫緊の課題である。貴重な一次史料を保全し、散逸・劣化を避け、同一時期に書かれた複数の日記の内容を検証する「ならべ読み」作業の円滑な実施をはかるために、データベースの整備が不可欠である。申請者は「女性の日記から学ぶ会」(千葉県八千代市・代表島利栄子)と協力関係を構築しつつあり、同会の許諾と協力が得られれば、上述した目録化の経験を活かし、日記資料のデータベース作成を実行できる立場にあった。

## 2. 研究の目的

(1) 一人の書き手の日記を時系列に読む「つづき読み」(通読)に加え、日記の書き手の所感や経験を共時的に検証する「ならべ読み」(併読)を可能にする。そのために日記資料データベースを構築し、日記を綴った当人の生の営みと時代性を明らかにする基盤を整備する。

(2) このデータベースのうち、大正昭和期の青年男女による「内面の日記」を集散的に読解し、そこに刻まれた自己形成の実態と過程を明らかにする。青年の日記には、読書記録、

文学界や思想界の動向に関する所感とともに、自己の存在意義に関する煩悶や、世界と自己の関係をめぐる思索が如実に語られている。これらを主要な手掛かりとして、日記の書き手による自己の表象・形成・変容について分析する。更に本研究では、貴重な先行研究である西川祐子『日記をつづるとのこと』(吉川弘文館)を批判的に継承しながら、「国民教育装置」による自己の規範化と逸脱の問題を重視し、過去、現在、未来が交差する重層的な自己表出の場である日記の果たした役割を解明する。

(3) 上記の事例研究を発展的に開き、近代日本の青年知識層における自己形成の問題を複眼的に理解する視座を獲得する。そのために申請者の個人研究の成果を、研究協力者との討議を通じて広い文脈に開いてゆく。研究協力者を得て、定例の討議会で研究を深化する。討議の成果は最終年度にはシンポジウムの開催と書籍化を通じて公に発信する。これにより、近代日本の青年知識層における自己形成を問題にする研究に新たな角度から光を当てる。

## 3. 研究の方法

(1) 「近代日本の日記帳」コレクションのうち、明治期から昭和期に綴られた青年男女の「内面の日記」を選定し、集中的に読解する。読解作業を踏まえた研究協力者との討議を定期開催する。その成果を近代日本における自己形成の問題に開いてゆくためにシンポジウムを開催し、成果を書籍化して公に発信する。研究者および市民との交流を深めるため、展示業務を職とする学芸員の協力を得て、日記資料と研究成果に基づいた「近代の日記帳展」を開催する。

(2) 「女性の日記から学ぶ会」の月例会に参加して知見を深める。許諾と協力が得られれば、目録化作業を実施する。

## 4. 研究成果

(1) 2014年8月より、「女性の日記から学ぶ会」(千葉県八千代市)の代表である島利栄子氏の許諾と協力を得て、同会収蔵の約3,000点に及ぶ明治以降に綴られた民衆の日記・家計簿・書簡類の目録化を開始した。作業人員には専門知識をもつ大学院生に加え、同会会員の協力も得られた。月一回の頻度で事業期間を通じて開催し、資料全体の約7割の目録化を果たすことができた。これにより、日記資料の「並べ読み」を実現するための基礎的な環境が整ったと言える。同会の日記資料は現在も各方面からの寄贈により増えつつあるが、未了分の日記資料の目録化は、申請者が分担研究者を務める別の科研費助成事業(「日記資料に基づく高度成長期日本民衆のデモクラシー意識の特徴と変容に関する研究」、代表:吉見義明、基盤研究B、

2015-2019)で継続し、2017年度末を目標に全体の目録化を完了すべく作業を進めている。

上記の目録化を進める一方、有名無名の人々による活字化された日記資料のデータベースが未整備であることの問題を痛感し、本プロジェクトの実績を踏まえ、将来の学術的活用のためのデータベースを制作する必要性を感じた。2016年3月には、国際基督教大学図書館に保管する数千点の日記資料(福田秀一氏蒐集)のうち、「戦場」と「銃後」をキーワードとして資料を抽出し、試験的なデータベース作成に取り組んだ。申請者の新規科研費助成事業(「活字化された日記資料群の総合と分析に基づく近代日本の「日記文化」の実態解明」若手研究B、2017-2020)において、この事業を本格化する計画である。

(2) 近代日本の青年知識層の「内面の日記」を分析するために、旧制第二高等学校のキリスト教主義の学生寮である「忠愛寮」の寮日誌を調査・分析した。同日誌は大正昭和期あわせて17冊が現存し、東北大学史料館が所蔵する。2014年8月および2015年3月の調査で日誌の全容を把握し、2015年8月には追加調査をおこなった。寮日誌は寮生全員の眼差しに曝されるものであるが、日誌の書き手には自己の偽らぬ「真実」を記すことが求められた。しばしば日誌紙面は書き手の思索や煩悶をめぐって他者の応答や議論が幾重にも追記される空間となった。いわば「多声響く内面の日記」といえる忠愛寮日誌の分析を通じて、戦前の青年知識層の思想と感情の実態を明らかにするとともに、その舞台となった日誌空間を近代日本の日記文化の文脈に位置づけて論じた。その成果は後述する「近代日本の日記文化と自己表象」第4回研究会(2015年5月9日)をはじめ、Nineteenth ASCJ(2015年6月21日)、旧制高等学校記念館夏季教育セミナー(2015年8月23日)、シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」(2016年9月18日)等で発表し、目下(2017年6月時点)のところ、シンポジウムに基づいた論文集に収録すべく、論文の形にまとめている。

(3) 研究活動を深化する場として研究会「近代日本の日記文化と自己表象」を組織し、2014年9月19日に第一回研究会を開催した。以後、2、3ヶ月に一度の頻度で定期開催し、2016年7月16日には第10回開催を迎えた。参加者数は毎回約20名ほどであり、その研究分野は、文学、歴史学、思想史学、教育史学、社会学、文化人類学など多岐にわたる。各回平均して2件の研究報告をおこない、第3回研究会(2016年3月7日)には「女性の日記から学ぶ会」代表の島利栄子氏にもご報告いただいた。また、第7回研究会では、『五十嵐日記』(笠間書院、2014)の著者でもある五十嵐智氏にもお話頂くことができた。研

究会は今回の助成事業の年度内で終了することなく2017年度以降も継続し、更なる研究の深化を目指す集いの場として機能している。

(4) 上記の研究会の活動の成果として、2016年9月17、18日の2日間にわたり、学際シンポジウムを開催した。計19本の研究報告は基本的に研究会での報告に基づくが、それらに加え、「近代日本の日記文化」を浮き彫りにし、相対化するために、近現代タイの日記文化(西田昌之報告)、ヨーロッパの日記研究(宮田奈奈)、日本中世の日記文化(松園齊)を設けた。また、シンポジウム両日の冒頭では田中が総論的報告をおこなった。更に17日の研究報告終了後には、「女性の日記から学ぶ会」代表である島利栄子氏と田中による「特別対談」を設けた。また、同会のご協力により、両日ともシンポジウム会場では「戦中戦後の日記いろいろ」展を開催することができた。多くの研究者・一般来場者に恵まれ、有益な研究報告と討論の場となった。シンポジウムの成果は論文集にまとめて2017年度内に出版する予定である。

(5) 日記は歴史資料であると同時に、解釈を要するテキストである。またそれは、需要に応じて(あるいは需要を創出し)多様に生産流通する出版物であり、修養や人格陶冶を目的とした教育装置でもある。そうした広がりをもつ日記とその文化を考察するために、学際的な研究体制の構築は不可欠である。今回の事業では、研究会およびシンポジウムの活動を通じて、近代日本の日記文化を考察するための学際的な研究体制の基礎を築くことができた。個別の学問領域の知見や方法論を尊重し、相互に越境しながら研究活動を深化することは、従来の学問領域の再編制が急速に進む今日にこそ欠かせない。2017年度からの新規研究事業では、今回の事業で得られた研究体制の一層の強化を図りたいと考えている。

(6) 学際的な研究体制に加え、近代日本の日記文化を自明視しないためには国際的な研究体制の構築が不可欠である。従来、日本の日記習慣はあまりにも自然視されていた嫌いがある。しかし学校教育における提出義務と点検指導に象徴されるように、その習慣が他国にも普遍的に見られるものとは決して言えない。例えば、タイにおいては「日記」にあたる語がなく(英語のdiaryを代用する)、学校教育での日誌指導もごく近年始まったばかりであるという。今回の事業ではこの問題意識を強め、近代日本の日記文化の特殊性と普遍性を検証するために、国際的な研究体制を築く必要を実感し、上述したシンポジウムではその第一歩の試みをおこなった。2017年1月15~18日にかけて、全北大学(韓国全州市)

で開催された国際シンポジウム ” The Main current of Personal Document Study in East Asia: Comparative Perspective on Compressed Modernity ” で近代日本の日記文化を紹介し、韓国・中国・日本の研究者と討論し、今後の国際的な連携を約束したことにも大きな意味がある。2017年度以降の新規事業では、国際的な研究体制の強化に努める所存である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 12 件)

田中祐介 『『書くこと』の歴史を問うために一研究視座としての『日記文化』の可能性と学際的・国際的連携』、『日本近代文学』、査読無(招待有)、第 96 集、2017 年 5 月、138-145 頁

田中祐介 「学術シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」を開催して」、『日記ろまん』 査読無(招待有)、第 66 集、4-4 頁

田中祐介 「より豊かな日記の読み解きをめざして 『女性の日記から学ぶ会』の日記帳の目録作成とその意義」『女性の日記から学ぶ会編『女性の日記から学ぶ会 二十年の歩み 平成 8 年～28 年』、査読無(招待有)、2016 年 5 月、145-145 頁

田中祐介 『『飯塚とみ日記』を読む 1945 年～47 年』、『日記ろまん』、査読無(招待有)、第 64 号、5-5 頁

田中祐介 「恐れず、怠ることなく日記をつづれ 学徒兵の『軍隊日誌』にみる点検指導と軍人精神」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 8 号、2015 年 8 月、44-51 頁

田中祐介 『『軍隊日誌』に刻まれた学徒兵の体調悪化と日誌の途絶』、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 6 号、2015 年 6 月、35-38 頁

田中祐介 「近代日本の日記文化と自己表象」、『レポート笠間』、査読無(招待有)、第 58 号、2015 年 5 月、1-3 頁

田中祐介 「学徒兵の『軍隊日誌』にみる部隊長訓示」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 5 号、2015 年 5 月、42-44 頁

田中祐介 「日本軍の日記文化とその教育史的背景に関する覚え書き」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 4 号、2015 年 4 月、31-33 頁

田中祐介 「戦時下の少女の日記と教員の叱責(2)」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 3 号、2015 年 3 月、33-36 頁

田中祐介 「戦時下の少女の日記と教員の叱

責(1)」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 2 号、2015 年 2 月、28-33 頁

田中祐介 「日記資料群からみる青年知識層の生活と自己形成」、『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』、査読無、第 1 号、2015 年 1 月、25-29 頁

〔学会発表〕(計 16 件)

Yusuke Tanaka, How and What People Wrote from/against Their Will: Based on the Findings of the Research Project on Modern Japanese Diary Culture and Self-Representation, The Main current of Personal Document Study in East Asia : Comparative Perspective on Compressed Modernity, 2017 年 1 月 17 日、全州市(韓国)

田中祐介、国民教育装置としての日記文化を掘り下げる 近代学校教育における『自己をつづること』の規範化と逸脱、中等教育史研究会例会、2016 年 9 月 30 日、横浜国立大学(神奈川県・横浜市)

田中祐介、総論 2 日記という「遺産」、学際シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」、2016 年 9 月 18 日、明治学院大学(東京都・港区)

田中祐介、総論 1 日記という「行為」、学際シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」、2016 年 9 月 17 日、明治学院大学(東京都・港区)

Yusuke Tanaka, Writing Inculcated Genuine Heart: Self-expression and Censorship in Modern Japanese Diaries, AAS in Asia conference, 2016 年 6 月 26 日、同志社大学(京都府・京都市)

Yusuke Tanaka, The Conformed/Deviated Self in Diaries of Modern Japan: The Diversity and Contradiction of Self-expression, AAS in Asia conference, 2016 年 6 月 26 日、同志社大学(京都府・京都市) パネルオーガナイズ

田中祐介、自己について綴り、あるいは綴らされるということ 近代日本の日記文化における自己表象の自発と強制、規範化と逸脱、愛知学院大学人間文化研究所プロジェクト研究会「日記文化のひろがり」、2016 年 2 月 20 日、愛知学院大学(愛知県・日進市)

田中祐介、より豊かな日記の読み解きをめざして 「女性の日記から学ぶ会」収録の日記帳を目録化する、「女性の日記から学ぶ会」例会、2015 年 9 月 9 日、男女共同参画センター講習室(千葉県・八千代市)

田中祐介、自己について「書く」ことと「書かされる」こと 日記教育からみる近代日本の書記文化、チェンマイ大学人文学部日本研究センター講演会、2015 年 8 月 30

日 (チェンマイ市・タイ)

田中祐介、寮日誌からみる旧制高等学校生の思想と信仰 第二高等学校の忠愛寮を事例として、旧制高等学校記念館 第20回夏期教育セミナー、2015年8月23日、旧制高等学校記念館 (長野県・松本市)

Yusuke Tanaka、Polyphonic Space for Self-expression: Christian Dormitory Diaries at the Second Higher School during World War Two、Nineteenth ASCJ、2015年6月21日、明治学院大学 (東京都港区)

Yusuke Tanaka、Mass Literacy in Modern Japan: Transformed Practices of Reading and Writing、Nineteenth ASCJ、2015年6月21日、明治学院大学 (東京都港区)

パネルオーガナイズ  
田中祐介、多声響く 内面の日記 : 戦時下の第二高等学校『忠愛寮日誌』にみるキリスト教主義学生の心情・信仰・炎上の論争、「近代日本の日記文化と自己表象」第4回研究会、2015年5月9日、明治学院大学 (東京都・港区)

田中祐介、『飯塚日記』(1945年7月~11月分)を読む、「女性の日記から学ぶ会」例会、2015年3月11日、男女共同参画センター講習室 (千葉県・八千代市)

田中祐介、手書きの日記史料群は研究をいかに補い、掘り下げ、相対化するか 国際基督教大学アジア文化研究所蔵『近代日本の日記帳コレクション』を中心に、「近代日本の日記文化と自己表象」第1回研究会、2014年9月20日、国文学研究資料館 (東京都・立川市)

田中祐介、庶民の日記からみる近代日本、「女性の日記から学ぶ会」例会、2014年7月9日、男女共同参画センター講習室 (千葉県・八千代市)

〔その他〕

ホームページ等

diaryculture.com (近代日本の日記文化と自己表象)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田中祐介 (TANAKA, Yusuke)

明治学院大学・教養教育センター・助教

研究者番号 : 40723135

### (2) 研究協力者

磯部敦 (ISOBE, Atsushi)